

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (心理学)	氏名	清水 陽香
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目			
対人的文脈における防衛的悲観主義 —課題関連場面からの拡張—			
論文審査担当者			
主 査	教 授	服 卷 豊	
審査委員	教 授	宮 谷 真 人	
審査委員	教 授	森 永 康 子	
審査委員	准教授	中 島 健 一 郎	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、課題関連場面で検討されてきた防衛的悲観主義を題材に、対人的文脈での拡張可能性について検討することを通して、防衛的悲観主義に基づく認知・行動パターンのモデル化を目指したものである。以下の7つの章から構成される。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は、第1節「防衛的悲観主義とは」、第2節「対人的文脈における防衛的悲観主義」、第3節「本研究の目的」から構成される。概要は次の通りである。</p> <p>悲観主義とその対概念である楽観主義が提唱されて以来、悲観主義は心身の健康を阻害したり、学業成績を悪化させたりするという点でネガティブなものとして扱われてきた。その中で、課題関連場面における成績の高さを説明・予測する概念として防衛的悲観主義が提案された。防衛的悲観主義は認知的方略のひとつとして、悲観主義ならびにそれに伴う不安が個人に種々のネガティブな帰結をもたらすとは限らないことを示すものであり、その点において画一的な物事への見方に対する警鐘を含蓄する概念である。しかし、日常生活に目を向けた場合、学校教育場面のように、学業関連とも対人関連とも解釈できる場面が存在する。ここでの社会的行動について防衛的悲観主義がどのような貢献を成すのか、現状では未検討のままとなっている。心理学の目的のひとつとして人間の社会的行動の説明・予測・制御があることを考慮すれば、悲観主義研究には看過できない問題点が残されていると言える。この解決を目指し、著者は5つの研究を実施した。その内容が第2章以降で述べられている。</p> <p>第2章「認知的方略と場面による熟考内容の異同」では、認知的方略による熟考内容のパターンが、学業場面と対人場面で共通しているのかどうかに着目した調査的検討の結果を詳述している。防衛的悲観主義者に着目した場合、両場面で共通のパターンが見出された。これは、防衛的悲観主義という概念を対人的文脈に拡張できる根拠として捉えられる。</p> <p>第3章「防衛的悲観主義が対人的文脈での準備に及ぼす影響」では、防衛的悲観主義者が対人的文脈において高い不安を持ちながらも、直面している事態への準備を行うのかどうかに着目した調査的検討の結果を詳述している。予測通り、防衛的悲観主義傾向が不安の高さを規定するだけでなく、事態への準備も規定することが示された。</p> <p>第4章「防衛的悲観主義と熟考内容の操作が他者からの評価に及ぼす影響」では、初対面の他者との会話場면을題材に、熟考内容の操作を行うことによって防衛的悲観主義者に対する他</p>			

者からの評価がどのように変動するかに着目した実験的検討の結果について詳述している。会話場面でネガティブな事態が生じる可能性を考えることが、防衛的悲観主義者に対する他者からの肯定的な評価につながることを示された。

第5章「防衛的悲観主義が対人関係形成に及ぼす影響」では、日常場面における対人関係の構築を題材に、防衛的悲観主義者の不安と行動、友人関係が時を経てどのように変化したかに着目した縦断調査の結果を詳述している。防衛的悲観主義者は対人関係構築場面でも不安を感じ、他者配慮的な行動をとる一方で、その帰結として精神的な疲労感を持つことが示された。

第6章「認知的方略による顕在的自尊心と潜在的自尊心の差異」では、防衛的悲観主義者が不安を持ちながらも直面の事態に向けて準備ができる背景として、潜在的自尊心の高さがあると考え、防衛的悲観主義者と、他の認知的方略(e.g., 方略的楽観主義や真の悲観主義)を用いる個人の自尊心の水準について比較した調査的検討の結果を詳述している。防衛的悲観主義者は、真の悲観主義者と同程度に顕在的自尊心が低い一方で、真の悲観主義者よりも潜在的自尊心は高く、その水準は方略的楽観主義者と同程度であることが示された。

最後に第7章「総合考察」では、第1節で各研究の成果を整理した上で、第2節では研究の学術的意義について、そして第3節ではその実践的意義についてまとめている。これを受け、第4節では研究全体に係る限界点と今後の課題を整理することを通して、研究の展開可能性について提案している。

本論文は、防衛的悲観主義に関する臨床社会心理学的研究として、次の2点において高く評価することができる。

(1) 防衛的悲観主義に基づく認知・行動パターンについてのモデルを構築した点

このモデルは、従来の悲観主義研究の問題点の解決につながるだけでなく、研究の新しい方向性を示すものである。一例として、防衛的悲観主義が学校教育場面における学業成績と対人関係のあり方に関する複雑な相互影響過程を説明・予測できる可能性が主張できる。課題関連場面や対人関連場面に依らないモデルが構築できたがゆえのものであり、その点において本論文の成果は大きいと評価できる。

(2) 新たな臨床的介入への方向性を提案した点

上記のモデルを含めた一連の研究成果は、臨床的介入におけるアセスメントのための基礎的資料として活用できるだけでなく、真の悲観主義者に対する新しい介入研究の方向性を提案するものである。真の悲観主義者は従来の悲観主義者に相当する人々であり、心身の不健康から介入の対象として扱われてきた。これまでの介入研究では不安の低下を目指したものが多く報告されているものの、その有用性はいまだ議論の最中にある。本論文の成果を踏まえれば、必ずしも不安の低下は必要ではなく、さらに潜在的自尊心の向上が状況の改善にとって必要である可能性が指摘できる。介入研究へと実際に展開するためには、検討すべき課題が残されているものの、その道筋を拓いた点において本論文の成果は大きいと評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。